

## + 5 6 【こん・ほう】

「いちばんでっかいおぼけは、なにかのう」

と懐爺にききました。

しばし懐爺は空中を、あるいは空中に飛ぶ鳥を見つめていましたが、おもむろに口をひらきます。

「大昔の中国の荘周というひとが『莊子』という書物で、

北冥に魚あり、其の名を鯤（こん）と為す。

と記しています。この鯤の大きさは、何千里あるかわからないほどです」

「なんぜん〈めーとる〉でなく、なんぜん〈り〉かい。りかいできんのう」

「【こん】が変身して鳥になると、鵬（ほう）といいます。【ほう】の背中は何千里あるかわからないほどです」

「ほう」

「【ほう】が勢いよく羽ばたいて飛び立つと、その翼はさながら大空の果てまで垂れこめた雲のようです」

「おおぼけものじゃ」

ぼくの「おお」は歓喜の「おお」でもあります。

「【ほう】は海が大きくうねりだすとき、南の果てなる暗い海めざして移りゆこうとする。南の果ての暗い海とは〈天の池〉なのです」

「〈てんのいけ〉かい。てんは、てんにあり、いけは、ちにある。てんで、りかいできんのう」

「地にある池ではなく、天にある池です」

「いけいけ、じゃのう」

〈いけいけ〉はむかしからあった言葉です。

「ふざけないでください。この【こん・ほう】の話には何か深いものがあります」

「ふかい、かのう」

「不快ではなく、深いです。金ちゃんも何かかんじませんか」

「かんじるのう。わしは【こん】になって、そいでもって【ほう】になりたいのう」

「金ちゃんならなれますよ」

「そのためには、まんずさかなにならんといけんのう」

というわけで、ぼくはそれから水泳を熱心にやり始めました。